



赤羽別院報 第26号
発行所 谷派 親宣寺
真宗大別院
発行人 浅野 伸
編集 浅野 伸
愛知県幡豆郡一色町 大字赤羽字上郷中14
Tel-Fax (0563) 72-2308

『今、いのちがあなたを生きている』 無量寿に帰す



親鸞聖人はいつも、仮のもの、偽のものを区別して真と偽とを言われま

いのち
『今、いのちがあなたを生きている』がよくわからないという意見をお聞きします。ただ、「いのち」というものを、人間のものの見方で考える「いのち」とそうでない「いのち」があるのではないかと思います。

そこです。親鸞聖人が直接いのちについておっしゃっている「無量寿」を手がかりにお話したいと思えます。

無量寿
この「いのち」という事を考える時、「正信偈」の一番始めの「帰命無量寿如来」というお言葉が大事だと思えます。長いとか、短いとかいうもので量れないいのち、これが「無量寿」であり、分量と関係のないいのちです。この無量寿によつて何がはつきりするかとすると、私たちが日頃見ているいのちはこの反対です。いつもお勤めする「弥陀成仏のこのかたは」からはまるごと和讃で言えば、「有量の諸相ごとく」と書いてありますね。その有量のいのちばかりを見ています。私たちが思っています。二〇〇の視力があっても真暗闇では絶対に見えません。そこにマッチ一本の火が灯れば見える眼です。つまりものを見せ

食べられないか。最後には人間にも当てはめず。役に立つか立たないか、もつとひどくなるか、生きる価値があるかないか。これが私たちのものの見方の癖になつてしまつた。このようなものの見方は本当であるのかどうかという事を照らし出してくるのが無量寿のほたるきです。一首目のご和讃で言えば、「世の盲冥」と言われています。盲というのはいくらも悪い目があるから目先のことに騙されるといふことでもあります。立派な身をして、肩書が一杯の名刺を見ても、本物があつて騙されるのです。こういう外見や表面のところで乗せられてしまふ。世の中全体がそうなつていふのが「世の盲冥」であります。



光と闇
光というのはものを見せてくださるはたらきです。私たちが目が見えないからものが見えると思つていますが、二〇〇の視力があつても真暗闇では絶対に見えません。そこにマッチ一本の火が灯れば見える眼です。つまりものを見せ

講師プロフィール
一楽 真師 (いちらくまこと)
1957(昭和32)年生まれ
石川県小松市
真宗大谷派宗園寺住職
現在 大谷大学教授
専門は真宗学
著書
「親鸞聖人に学ぶ—真宗入門」
「この世に生きる念仏の教え」
その他多数

撰取不捨
一人ひとり本当にかけがえのない人生だということに照らし出してください。無量寿のほたるきです。インドの言葉に返せば「アミター」です。これを親鸞聖人は弥陀経和讃で「撰取して捨てざれば」と述べておられます。「十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし 撰取してすてざれば 阿弥陀となづけたまはつる」。どんな者も撰取とて捨てない、だから阿弥陀とお名づけるのです。阿弥陀は、どんな者も分けへだてしない、お前はダメだと言わないのです。これが無量寿といふいのちの世界であります。

お寺の掲示板

物をつくるには
心を以てし
法を受くるには
身を以てす
第14組 西光寺
(金子大栄師)

門徒の聲

絆 (きずな)
昨日、地元中学校の卒業式に出席した折、堂四帖敷に近い大きな紙に絆の一字を大書して、何の説明もなく壁面に飾ってありました。じつとその文字を見つめて気がきました。糸編に半を合せて絆という字ができています。つまり「自分は半分だが周りの全てのものに糸で結ばれているからこそ、私があるのですよ」と教えられた気がしました。

3月20日(日) 午後1時	法話 第13組 安休寺 雲英 真人師
3月21日(月) 午後8時	法話 第12組 願海寺 帯郷 有二師
3月22日(火) 午後1時	法話 第14組 蓮成寺 青木 馨師
4月11日(日) 午後1時	報徳会 ほつとくえ
法話 第8組 安楽寺 伊奈 恵祐師	
6月6日(月) 午後1時	法話 未定
6月6日(月) 午後1時	法話 未定
4月28日(木) 同	妙尊寺 林 良照師
5月13日(金) 第11組	本澄寺 新田 智則師
5月28日(土) 同	浄林寺 松平 昌三師
6月13日(日) 第12組	浄徳寺 松平 昌三師
6月28日(火) 同	浄徳寺 松平 昌三師

別院行事のご案内

3月13日(日) 第9組	了淨寺 大深 專淳師
3月28日(月) 同	妙隆寺 大深 康照師
4月13日(水) 第10組	香嚴寺 鈴木 士平師
4月28日(木) 同	妙尊寺 林 良照師
5月13日(金) 第11組	本澄寺 新田 智則師
5月28日(土) 同	浄林寺 松平 昌三師
6月13日(日) 第12組	浄徳寺 松平 昌三師
6月28日(火) 同	浄徳寺 松平 昌三師

農朝法話

3月13日(日) 第9組 了淨寺 大深 專淳師
3月28日(月) 同 妙隆寺 大深 康照師
4月13日(水) 第10組 香嚴寺 鈴木 士平師
4月28日(木) 同 妙尊寺 林 良照師
5月13日(金) 第11組 本澄寺 新田 智則師
5月28日(土) 同 浄林寺 松平 昌三師
6月13日(日) 第12組 浄徳寺 松平 昌三師
6月28日(火) 同 浄徳寺 松平 昌三師

殉教法要

3月13日(日) 午後1時
法話 未定
主催 殉教記念会

尾畑文正師をお招きし

真宗講座を開催

過1月24日、教化センター主催により第一回真宗講座が開催された。

講師に、同朋大学学長の尾畑文正師をお迎えし、この度の御遠忌基本理念「宗祖としての報恩聖人に遇う」を講題に、聖人の遺された御消息（お手紙）を手がかりに、自らの体験を交えてわかりやすくお話しくださいました。

師は、本山発行の同朋新聞に「親鸞聖人の歩みから」と題し、一年半余り宗祖の御消息を読み解いて連載された。なかでも宗祖の生涯、特に79才から89才までの10年を、宗祖が自らの信心に腰を下ろさない歩みを重ねられたことに注目された。

連載執筆にあられる数年、師が念仏者として多大な薫陶を受けた、故和田禰師に「現在、先生は何を課題としておられますか」とお尋ねしたところ「私は、念仏・本願・信心を載いて人にもお伝えしてきたつもりでしたが、それはみな概念上のことにすぎなかった。自らの問題を縁に



(稲垣記)

帰敬式を受けて

授かった法名は「釋尼干譽」。お手次寺のご住職が幾つかの候補の中より、悩まぬいたすえ決めたのだと伺っていただきます。

宗祖の一字をいただき、大変恐縮いたしておりますが、二門首自ら執刀していただいたことと合わせて二重の喜びでした。

受式のきつかけは、長年お華をたしなんでいたことから、六年ほど前よりお寺の仏華を立てさせていただくようになり、法要の

運ぶようになったことです。私は実家も同じ宗旨で、子供の頃は境内で遊びまわったり、夏休みにはみんな宿題を持ちつたりとお寺はとても身近な存在でした。

このご縁をいただいたことは、私にとって数十年を経て、再びお寺を身近に感じることであります。「お寺との再会」でした。そのようなかでのお話でしたので是非に受けさせていたただいたわけです。

当日は、五十年に一度の



御門首より法名授与

「お待ち受け法要」という大舞台での儀式ということもあり、とても厳かな雰囲気なかで行われ、剃刀を

あてていただいた時には自然と頭がさがる思いでした。また、用意された紙に自分の二つ目の名前である法名を書き入れたときは、子供の頃初めて自分の名前を書いた時と同じような新鮮な気持ちでした。

まだまだ、教義の難しいことは解りませんが、仏弟子として今更以上に、お寺として法が身近になる生活をおくるよう心がけてまいります。

第10組・願正寺門徒 杉浦千枝子

双全講を厳修

厳寒の1月15日、明治中期に法義相統と赤羽別院護持の双全講を目的に組織された双全講が営まれました。

午前中は、旧年中におこたりになった方々のお名前を「法名記」に記して追年会と永代供養を、午後には報恩講もお勤めされました。

法話では、蓮正寺住職・稲垣師がその大きな身体で、寒波を吹き飛ばす如く、篤く力強くお話をされました。地域密着の双全講は、セン



稲垣師による法話

平成23年(2011年)初鐘・修正会

長きにわたり、不透明感から脱却することのできない世相を払拭するが如く、昨年10月、宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌お待ち受け法要を、御門首御親修により、御成した当別院では、大晦日の午後11時30分、五人連の一家による第一打を皮切りに、次々に訪れる参詣者がそれぞれ撞く鐘を込めて撞く鐘の音は、周りに響き渡り、平成23年の扉は開かれた。



3人揃って一打

お御堂の中では、温かいあま酒がふるまわれ、寒さにふるえる手をストロップにかざして暖め、ご本尊に手を合わせお詣りする除夜の光景が続いた。

夜が明け初日の朝、午前7時から修正会が厳修された。修正会は、新年を迎えて最初の勤行で、和讃は初讀に、お文は一帖目第一通に戻してお勤めされた。

勤行につづき、輪番の年頭の挨拶では、昨秋の報恩講・宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌お待ち受け法要に対する謝意と今後とも赤羽別院が皆さま方のお力で護持・相統されていくことを願うものであることを話された。

その後、世話方さんが仕度して下さったお節料理をいただきながら、修正会にご縁を戴けたことへの感謝と、新年の抱負を語り合



朝日が差し込む中でお互挨拶

「お待ち受け法要」という大舞台での儀式ということもあり、とても厳かな雰囲気なかで行われ、剃刀を

あてていただいた時には自然と頭がさがる思いでした。また、用意された紙に自分の二つ目の名前である法名を書き入れたときは、子供の頃初めて自分の名前を書いた時と同じような新鮮な気持ちでした。

まだまだ、教義の難しいことは解りませんが、仏弟子として今更以上に、お寺として法が身近になる生活をおくるよう心がけてまいります。

第10組・願正寺門徒 杉浦千枝子

法要当日は、会場の設営や管理など御堂外の任務に就いたため、法要には臨場してお詣りには叶わなかったが、お御堂に入りきれずテナント席からお詣りされる参拝者が大勢みえたこと、受式者が百名を超えた帰敬式などかつて見たことがなかった別院を見ることができました。

第11組・門徒会会長 牧重男

できる大切な行事です。人は、多くの他人と触れ合うことで新しい世界が開け、人格形成に役立ちます。

今回は、小さなお子連れれの若いお母さん方もお詣りされ、穏やかで温かい時間が流れていきました。

御門首ご夫妻には、参加させていただいた歓迎懇談会の席で、常に笑顔で人に接しておみえになり、やさしそうなお人柄に身近に接することができ感激しました。

報恩講・お待ち受け法要3日間をとおして、実行委員や世話方さんが力を合わせて全力で取組んだその成果は素晴らしいものであります。敢えて反省点を挙げるとすれば、各組の門徒会員の参詣者が少なかつた事です。その原因は、別院と門徒会との協力体制が確立していかかつたことによるものと考えられ、このことにも見受けられ、今後の課題とし双方で解消していかなければならない問題と考えます。

第11組・門徒会会長 牧重男

「お待ち受け法要」という大舞台での儀式ということもあり、とても厳かな雰囲気なかで行われ、剃刀を

あてていただいた時には自然と頭がさがる思いでした。また、用意された紙に自分の二つ目の名前である法名を書き入れたときは、子供の頃初めて自分の名前を書いた時と同じような新鮮な気持ちでした。

まだまだ、教義の難しいことは解りませんが、仏弟子として今更以上に、お寺として法が身近になる生活をおくるよう心がけてまいります。

第10組・願正寺門徒 杉浦千枝子



購名「双全講」は、当別院だけの由緒あるものであります。(本多記)

まごころ込めておつくりします

吉崎礼二郎 仏壇 二店

総本家五代目 仏壇仏具 製造販売 洗い修理

〒444-0104 一ツ木 愛知県稲沢市色町本赤羽別院前 電話 〇五六-三七二八五七七番

西尾店・高浜店・碧南店・半田店

春彼岸 SALE 開催中

親思いの仏壇・墓石登場!! 納骨壇設計・施工致します!

70周年 111周年 くじ引き大抽選会

心づながる やすらぎのネットワーク 永田竹佛壇店

城郭伽藍の姿を留める 安城市 本證寺を訪ねる (No.2)

野寺 三河三ヶ寺の筆頭・雲龍山本證寺は、全盛期には寺中四ヶ寺、家老・代官の家々が建ち、二万一千坪を誇る境内地を持ち、二百を数える末寺を抱えていた。

今回は、本證寺第十代空誓が代官として徳川家康と対峙した、永禄の一向一揆について小山正文住職にお話し頂いた。

徳川家康が三河国を支配するうえで最も必要としたものは家臣を養う米であった。そこで家康は、三河三ヶ寺から本願寺へ上納されていた米に目をつけたのである。

一五六(永禄5)年、近江国堅田(現在の滋賀県大津市)の慈敬寺から空誓(運如上人の孫)が空誓、本證寺の第十代となった。

「三洲一向宗乱記」によると、空誓が教線を延ばしていた一

この時代は身分制度が明確でなく、侍も百姓、百姓も侍であり、戦は種入れが終った。三ヶ寺側と家康の争いが続くなか、本證寺筆頭末寺円光寺住職・順正が空誓の身替りとなって自害したが、それと知らぬ家康は和議を結び、本證寺は攻め込まれなかった。ところが、家康は数ヶ月後の農繁期の最中に不意をついて浄土真宗の寺院を悉く潰して、三河の真宗は禁制となったが、二十年余り後の一五八二(天正10)年、真宗門徒である家康の叔母・石川妙香尼の熱心なはたらきによって禁制が解かれた。



威容を誇る庫裡など

てからの農閑期に行われ、お寺に味方すれば今世と来世に亘って奉公することになるが、家康に就くことは今世のみの奉公となるため、家康の家臣といえども本願寺に味方する者が多かった。

助音講では大声を出して声明の練習をし、お待ち受け法要の時には、家内共々先祖様に届けたいという気持ちで唱えました。

◆ 仏事 ◆

◆ 葬儀や法事・報恩講など仏事にお参りするときや寺院へのお礼の金封は、どのように表書きしたらよいですか？

◆ 宗教宗派により様々な書き方がありますが、私たちの真宗大谷派では「御霊前」「御経料」の表書きは致しません。様々な仏事における表書きを紹介いたします。

◆ 通夜 御淋見舞

◆ 葬儀 御香儀

◆ 法事 御香儀

◆ 報恩講 永代経法要など

◆ 葬儀や法事を勤めていた

御志

御志

御志

御志

御志

御志

御志

御志

御志

御志

御志

長寿寺で火屋葬儀執行



屋外での火屋葬儀

去る11月27日、第13組長寿寺前住職和田法雄師の葬儀が、火屋葬儀により厳かに執り行われました。長寿寺では、先々代住職の葬儀が火屋で行われたことから、同じように火屋葬儀が火屋で行われたいという事で役員と相談のうえ、伝統的な葬儀を出すことに決定したそうでありました。

火屋は、幸田町の大須には多くの人の手を借りないとい出来なかつたというところが、幾らかでも解った気がしました。当日は、秋の透きとおった青空のもと、葬儀式は厳かに滞りなく執り行われました。今回のこの経験は、次の世代に伝えていく義務を与えられたように思いました。(本多記)

責任役員 高須登代子女史御逝去

赤羽別院の責任役員高須登代子女史は、昨年11月30日葉石効なくご逝去されました。女史は、同じく責任役員であった母親たま女史についで、昭和54年同様に就任以来、31年余の永きに亘り重責を全うされました。

高須家は、熱心な仏法篤信の家系で、昭和34年の伊勢湾台風による本堂他の倒壊、平成9年御堂の新築、また、昨年の御遠慮お待ち受け法要等々、折にふれ格別のご懇意をお寄せ下さるなど物心両面でお支えを頂いてまいりました。12月5日、当別院御堂において営まれた告別式には、五百人を超す弔問者が故人の遺徳を偲びお参りされました。(石川記)

赤羽地域教化センターウェブ

http://www.katch.ne.jp/~akabane_betuin/

仏事で困ったら...

携帯からのアクセスはQRコードから
お寺の法語掲示板をみてみよう



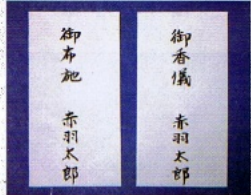
三年間のご愛読に感謝

私たちが編集委員が赤羽御坊の編集に携わることになって早三年が経ちました。広報の目的は、新たに設立された赤羽地域教化センターの活動に関する情報や別院行事を知って頂くための情報を提供することにあります。また、崇敬地域の寺々が創意工夫して取り組んでおられる各種行事の内容や、ご門徒さんのご意見を広くお知らせしていきたいと考えています。

これらの記事に交えて、真宗に縁の深い寺を訪ねる歴史探訪、真宗仏教の篤信家を尋ねるシリーズものにも取り組まれました。記事があるだろうか心配してスタートしましたが、予想以上に寺の活動は活発で、紙面が不足して困窮することもありました。親しみやすい紙面を心がけてまいりましたが如何でしたでしょうか。ここで一つの区切りとなります。これまでのご支援、ご協力とご愛読を心から感謝申し上げます。

編集委員一同 御礼
占部 寧(第11組)
三村 謙作(第10組)
赤羽御坊編集長
本多友明(第8組)
石川 祐美子(第10組)
稲垣 智(第10組)
佐々木 貞成(第11組)
平野 知(第11組)
小栗 貴次(第12組)
浅野 理子(第14組)
東 陽芳幸(兼林寺住職)
鳥居 伸子(願正寺門徒)
新家 ゆり子(永誓門徒)

広報部部長
広報部副部長
赤羽御坊編集長
本多友明(第8組)
石川 祐美子(第10組)
稲垣 智(第10組)
佐々木 貞成(第11組)
平野 知(第11組)
小栗 貴次(第12組)
浅野 理子(第14組)
東 陽芳幸(兼林寺住職)
鳥居 伸子(願正寺門徒)
新家 ゆり子(永誓門徒)



表書き例

いた寺院へのお礼 御布施
このように表書きし、この下に「氏名」を、また、裏側正面に「金額」を記します。
あくまでも、基本的な例を示すものであり、ところによって違いがあるのが実情です。(小栗記)



永井さんご夫婦

長年にわたりお手次寺の総代や同朋会活動などで活躍のかたなら、御夫婦がお語りや聴聞におかけになり、念仏相続を大切にされている。西尾市今川町 永井良一・さよ子ご夫妻
をお尋ねし、ご門徒さんの真宗の教えに対する篤い思いを学ばせていただきました。

どのようなきっかけで寺に携わるようになったのですか
親が同朋会員でありましたし、夫婦揃って農業一筋でこれといった趣味もなく、同朋会であちこちのお寺詣りや行った先の温泉が楽しみで、お寺に足を運ぶことが喜びとなり、それがとてもありがたく思えたからです。
報恩講をはじめお寺の行事で大変な活躍と伺っていますが具体的なことはどのようなことですか。
まず、報恩講の仏華・お華束作りですが、仏華

は三河別院や中原町の松田由彦さんに25人程一緒に教えていただいております。色んな仏華を見ては写真で撮らせていただきます。手次寺の厳西寺さんでは、仏華・お華束作り

(藤原記)